

年下大型ワンコな彼の躾に失敗して、逆に特大の愛でわからされてしまった【遠征編・体験版】

【本作をお読みいただく前に】

本作はフィクションです。登場人物はすべて成人です。

実在の人物・団体とは一切関係ありません。内容は変更になる可能性があります。

【過激な描写に関するご注意】

一部、過激な性描写（羞恥・ポルチオ・言葉責め）を含んでおります。

シチュエーションおよび、過激な性描写が苦手な方は、閲覧をお控えいただくか、十分ご注意の上でお楽しみいただけますようお願いいたします。


体験版

登場人物紹介

・長浜　大地（ながはま　だいち）／　23歳

身長１９０㎝超の巨躯を持つ年下男子。普段は大人しく素直で清潔感のあるイケメンだが、ベッドの上では独占欲が爆発する底なしの絶倫。

・吉岡　美月（よしおか　みつき）／　26歳

ライブハウスのスタッフ。明るくサバサバしていて面倒見が良い。大人な姿勢を見せようとするが、流されやすい一面も。

目次

1、遠征前夜の攻防..... 4

3、届かなかった一勝 20

4、突然の豪雨……64

5、持って来ていたあれ.....75

6、甘やかしてあげる 90

7、帰りたくない.....117

あとがき ……131

1、遠征前夜の攻防

明日は、朝から遠出をする予定だ。

目的地は隣県。大地が参加している社会人バレーボールチームの、アウェーでの試合がある。

片道一時間半ほどのドライブを予定しており、試合の応援をして、帰りにはどこかで美味しいものでも食べて帰るつもりだった。

遠征についてきてくれと頼んできた時の大地は、いつにも増して嬉しそうだった。

美月がもちろん応援に行くと伝えると、それだけで、試合への気合いが普段の何割増しかになるらしい。

……いや、普段から十分すぎるほど気合いは入っていると思うのだけれど。

「大地くん、明日って何時に出るんだっけ？」

「朝の七時です！」

「うん。じゃあ、そろそろ寝ないとね」

「はい！」

美月はベッドに腰を下ろし、隣をぽんぽんと叩いた。大地は待ってましたと言わんばかりに、長い脚を持て余しながら隣に滑り込んでくる。

そして、当然のように美月の腰へ腕を回した。

「……近くない？」

「そうですか？」

「ベッド、まだ半分以上空いてるんだけど」

「美月さんの隣がいいので」

大地は悪びれる様子もなく、美月の肩口に頬を寄せ、首筋に鼻を押し付けて匂いを嗅いでくる。大き

な身体を丸めて甘えてくる姿は、まるで自分のサイズをわかっていない大型犬のようで可愛い。

好きな相手には、好きだと隠す気がまったくない。嬉しいことがあれば全身で喜び、寂しければわかりやすくしょんぼりする。身体は立派な大人なのに、見た目や行動は大型犬そのもの。

「明日は試合なんだから、ちゃんと寝ること。いい？」

「……はい」

ほんの少し返事が遅れた。美月が横目で睨むと、大地はにこっと笑う。

「なーに、その間？」

「いえ。美月さんは今日も可愛いなあと思って」

「話をそらさないの」

「そらしてません。本当に思ったことを言っただけです」

「もう……」

こういうところが、ずるい。からかってやろうと思っていたのに、まっすぐな甘い視線でそんなことを言われると調子が狂ってしまう。

美月が小さく息をつくと、大地はその隙を見逃さなかった。耳をカプっと齧って、首筋に吸い付いてくる。あまりにも甘い求愛行動に、美月の身体のスイッチが入りかける。

「ねぇ、今、寝るって話をしてたよね？」

「してました」

「キスはダメ」

「好きなんです、美月さんの全部が」

美月が呆れている間にも、大地は額や頬にそっと唇を寄せてくる。ひとつキスをするたびに、彼の表情が嬉しそうに緩むものだから、叱るタイミングを見失ってしまっていた。

しかも、こちらが本気で嫌がっていないことまで、しっかりわかっているのだ。

年上の余裕を見せて、慎重にハンドリングして、最後には自分の思いどおりにする。大地のことも、そうやって上手く手のひらで転がしていくつもりだったのに……。

「美月さん」

「なに？」

「こっち、向いてください」

言われるままに顔を向けると、大地が少しだけ真面目な顔をしていた。

普段はあんなに素直なくせに、こういう瞬間の彼は、ふいに年下らしさをなくす。

「……好きです。明日の遠征に来てくれるの、ほんとに嬉しいです」

「そりゃ、彼氏の応援くらい行くわよ」

大地が我慢できないと言わんばかりにキスしてくる。

「ちょ……ちょっと！」

「美月さんは、俺のこと好きですか？」

美月は少しだけ意地悪な気持ちになった。

「どうしようかなあ」

「……えっ」

「明日、試合で活躍できたら教えてあげようかな」

「ええっ、今じゃだめですか？」

「だめでーす」

途端に、大地は目に見えてしょんぼりしてしまった。あまりにわかりやすい反応に、美月はとうとう吹き出す。

「ふふっ、冗談だよ。好きだよ、大地くん」

大地の表情がぱっと明るくなる。まるで尻尾があったら、今ごろちぎれそうな勢いで振っていただろ

う。

「……もう一回言ってください。お願いします」

「だーめ」

「美月さん……ねぇ、美月さんってば」

甘えた声で名前を呼ばれ、美月はとうとう彼の胸元に顔を埋めた。これ以上、そんな顔をされては困る。

「ねぇ、もう一回言ってくださいよ」

額に、ちゅ、とキスが落ちる。

「……だめですか？」

その声が、あまりにも寂しそうで胸が締め付けられる。まるでこちらが悪いことをしているみたいだが、これに乗っかってしまうとまた抱きつぶされてしまうのを美月は知っている。

「美月さんが言ってくれるまで、キスやめません」

「……んな！」

遮る暇もなく、大地の唇が再び重なってくる甘く、深く、逃げる隙間を与えないキスだった。



舌をゆっくりと絡められ、息を吸うたびに彼の熱が口の中に流れ込んでくる。

「んっ……んむ……っ」

「好き、って言ってください。……美月さん」

耳元で低く、ねだるような声で問い詰められる。美月が拒むたびに、大地はさらに優しく、しかし執拗に唇を重ねてきた。

首筋に吸い付かれ、鎖骨を舐められ、甘い吐息を吹きかけられる。

「言わなきゃやめないですから」

「も、もう……好きだって、さっき言ったでしょ……っ」

「足りないです。もっと、ちゃんと。……俺だけを見てるって、言ってください」

大きな手が美月の腰を引き寄せ、ぴったりと密着させる。彼の熱いものが、太ももに当たっているのがわかった。まだ服の上からなのに、すでに硬く大きく膨らんでいる。

「美月さん……触れてもいいですか？」

「……ダメって言っても、触るんでしょ」

「美月さんが嫌じゃなかったら、触ります」

正直すぎる答えに、美月は苦笑しながらも身体から力を抜く。大地の手がゆっくりとシャツの裾に滑り込み、素肌を撫でてきた。

温かくて大きな掌が腰から背中へ、そして胸の下へとのぼってくる。

「柔らかい……。俺、美月さんのここ、好きすぎます」

ブラの上から胸を包み込まれ、親指が乳首の位置を探るように円を描く。すでに少し硬くなり始めていた先端を、布越しにこねられた。

「んぁっ……」

「感じてますね。……可愛い。明日試合なのに、美月さんが来てくれたらボールに集中できないかも」

「じゃあ観に行かないほうがいい？」

「だめです。だって、仕方ないじゃないですか。美月さんが俺の隣にいるだけで、我慢できなくなるんですから」

大地は美月の耳たぶを軽く噛み、低い声で続けた。

「明日、試合で活躍したらご褒美くれますか？」

「……どんなご褒美？」

「美月さんを、いっぱい独り占めして、俺の愛でいっぱいにしていいご褒美です」

「なに、それ？」

「美月さんの頭の中が俺でいっぱいになって、動けなくなるまで抱きつぶします」

言葉の端々に混じる独占欲と性欲に、美月の背筋がぞくりと震えた。大地はそんな反応を見逃さず、優しく微笑みながらさらに密着を強める。

「今夜は、寝る前に少しだけなんで。いいですか？」

「……少し、だけだからね」

「美月さんがイくまでします」

そう言って、大地は再び唇を塞いできた。大きな身体で覆い隠されるようにしながら、ゆっくりと、しかし確実に美月の服をはだけさせていく。

結局、美月はほだされてしまう。大地の熱い舌が首筋に這い、肩へ、背中へ向かう。くすぐったさと甘さが混じった感触に、美月の背中が小さく震えた。

「んっ……大地くん……」

「可愛い。美月さん、おっぱいも感度いいですよね」

大きな手がブラをずらし、むき出しになった胸を包み込む。

柔らかな膨らみをじっくりともみもみと揉みしだかれ、親指がすでに硬く尖った乳首を転がす。

「ぁっ……や、ん……」

「好きです。全身、舐めつくしたいです」

言葉通り、大地は胸の谷間を舐め、乳首を口に含んで甘く吸った。片方を舌で責めながら、もう片方を指で執拗にこねる。

美月の腰は逃げるように動くが、大きな身体でベッドに押しつぶされて捕まえられてしまっており、まったく動けず逃げられない。されるがまま、身体中にキスされ、甘い刺激にとろとろになっていた。

「おまんこ、もうびしゃびしゃですよね？」

下着をずらされると、すでに硬く勃起した大地の熱いものが、美月の濡れた秘部に直接当たった。ぞりぞり、と大きな亀頭が割れ目を上下に擦る。

「ひぁっ……！　あ、んっ……」

「美月さんのおまんこ汁で、ちんこがドロドロです。すごい濡れてます」

ぬちゃぬちゃと卑猥な音を立てながら、大地は腰をゆっくりと動かして擦り続ける。熱くて硬い感触がクリトリスを何度も掠め、美月の呼吸が乱れていく。

「も……挿れて……」

亀頭が入り口を押し広げ、ゆっくりと沈み込んでいく。

「……カリで、ここ擦られるの好きですよね？」

「や……んぁっ……！」

熱い肉が内壁を押し分け、深いところまで一気に埋め尽くされる。その後大地はゆっくりと呼吸を整え、そして浅い場所を広がった傘の部分でこすり上げた。

「はぁっ……美月さんのナカ、めちゃくちゃ熱い。俺のを締め付けてきてます」

大地は美月の腰を両手でしっかりと掴むと、後ろから覆い被さるように体勢を変えて角度を変えて突き入れる。

「後ろから、気持ちいいですよね？　深くまで入って、奥ゴリゴリすると美月さんのおまんこぎゅうぎゅう締まるから」

「あっ、あっ……深っ……んぁあっ……！」

大きな身体に完全に覆われ、逃げ場のない密着の中で、大地はゆっくりと、しかし確実に腰を打ち付け始めた。

～中略～



3、届かなかった一勝

試合が終わると、選手たちは片付けや次の試合の準備に取りかかった。美月は観客席を降り、邪魔にならない場所で大地が出てくるのを待つ。

しばらくして、スポーツバッグを肩にかけた大地が近づいてきた。

「美月さん」

「お疲れさま、大地くん」

「……ありがとうございます」

「いい試合だったよ。大地くん、すごく格好よかった」

「でも、負けちゃいました」

「うん、残念賞だね」

美月は出会った夜と同じように、スポーツドリンクを渡す。無理に励ます言葉を探さなかった。彼の手に触れる。大きな指先が、わずかに強張っていた。

「帰ったら、何か美味しいもの食べようね」

「……はい」

「せっかく遠くまで来たんだし。大地くんが食べたいものにしよう」

「美月さんは？」

「私は大地くんと一緒なら何でもいいよ」

そのとき、チームメイトの一人が大地を呼んだ。先輩だ。

「長浜、ちょっといいか。もう一回体育館の中チェックして、借りてた鍵返してきてくれる？」

「あ、はい。わかりました」

大地は返事をして、体育館の奥へと視線を向けた。

「用具室の鍵ですか？」

「そうそう。備品を戻したら、管理の人に渡しておいて」

「了解です」

どうやら、試合で使用した備品を片付ける必要があるらしい。大地は最年少らしく、素直に言うことを聞いていた。

「美月さん、少し待っててもらえますか？」

「私も手伝うよ。何か運ぶものある？」

「大丈夫ですよ。すぐ終わると思います」

「二人でやったほうが早いでしょ」

二人は使った備品が散らばっていないかをチェックし、体育館の奥にある用具室が片付いているかを確認する。

扉を開けると、そこにはボールやネット、支柱などが整然と並んでいる。大きな用具室は、体育館の広さに比べてもかなり奥行きがあった。

「これ、ボール違うとこにあるじゃん」

美月が棚の奥に置かれた備品を確かめようと身をかがめたとき、足元に何かが引っかかった。見ると、ストッキングの膝のあたりに細い伝線が走っていた。どうやら、棚の金具に引っかけてしまったらしい。破れた部分を指先で軽く押さえる。気にするほどのことではない。

ひと通り備品を確認し終えたところで、大地が倉庫の入口に立ち、体育館のほうへ声をかけた。

「倉庫のカギ閉めるので備品の残りがあれば今すぐくださーい」

しんと静まり返っており、誰もいないようだった。

「これで全部かな？」

「そうみたいですね。あとは鍵を返すだけです」

そう言った大地は、ふと手を止めた。美月が振り返ると、彼は棚の前に立ったまま、俯いていた。

「大地くん？」

「……すみません。せっかく応援に来てくれたのに」

「どうして謝るの？」

「勝つところ、見せたかったんです」

その声は、さっきよりもずっと小さかった。美月は彼のそばへ歩み寄る。

「勝てなかったことは残念だけど、私は大地くんが頑張ってるところを見られて嬉しかったよ」

「でも……」

「それに、今日の大地くん、すごく格好よかった。だから、そんな顔しないで」

美月は彼の頬に手を添えた。普段は自分よりもずっと頼もしく、何でも受け止めてくれる大地が、こうして弱さを見せてくれること。それを嬉しいと思うのは、少し意地悪だろうか。

大地の手が、美月の手に重なる。

「……美月さん」

「なーに？」

「もう少しだけ、こうしててもいいですか」

「いいけど……」

大地が一歩踏み出してきた力が強くて、美月はたたらを踏んだ。

「わっ」

思わず後ずさった美月の足が、床に置かれていたマットの端に触れた。体勢を崩した美月を、大地が慌てて支える。二人でマットの上に腰を落とすような格好になり、すぐ近くに彼の顔があった。

「ごめん。大丈夫？」

「大丈夫です」

見上げると、大地は心配そうに美月の顔を覗き込んでいた。その視線が、少しずつ違う色を帯びていく。

大地は次の瞬間、すぐに体育館の入り口を確認し、そして立ち上がると用具室の扉を閉めて内鍵をかけた。

「大地くん？」

「すみません、美月さん」

大地は覆いかぶさるようにして美月に抱き着いてきた。身体の熱と、試合後の汗の匂いが一気に押し寄せる。

股間をぐい、と押しつけてくる感触に、美月は息を呑んだ。すでに硬く熱を帯びたものが、ジャージの上からでもはっきりとわかった。

「わ、ここ、用具室の中だけど……誰か来るかもしれないし……」

「わかってます。わかってるんですけど……無理でした」

大地の声は低く、掠れていた。負けた悔しさと、美月への欲が混ざったような声。

首筋に顔を埋められ、熱い吐息を吹きかけられる。耳たぶを軽く噛まれ、鎖骨に舌が這う。

「美月さんがよろけたの見たら、我慢できなくなりました。ストッキング、破けてますし……」

「さっき引っかけちゃっただけだよ……んっ」

「ほかの人に見せたくないです。脱がせてください」

「え、ストッキング破けてるの変？　すぐ買い直せば大丈夫かなって……」

「そうじゃないんですけど……ごめんなさい美月さん。無理です、キスさせてください」

「待っ……んんっ」

唇を塞がれていて、美月はクラッとした。いつもと違う場所、埃っぽい体育倉庫。そして、小さい換気窓の外からは、多くの人の気配がある。

「だめ、ダメだってば大地くん……」

大きな手が美月のショートパンツにかかり、片足を強引に抜かれる。破れたストッキングをさらにビリビリと裂かれ、太ももが露出する。

大地は跪くようにして、ショーツの上から鼻を押しつけた。

「美月さん、もう熱いです。……匂いでわかります」

「や、やめて……外に声が……んぁっ！」

布をずらされ、熱い舌が直接秘部を舐め上げる。ゆっくりと、丁寧に、しかし容赦なく。クリトリスを舌先で転がされ、くちゅくちゅと音を立てて吸われていた。

美月は口を押さえて声を殺すが、腰が勝手に浮いてしまう。

「静かにしてください。美月さんの喘ぎ声、外に聞こえちゃいますよ」

「っ……ん、む……！」

外からは人々の笑い声が聞こえてくる。薄暗い用具室で、美月の体温と呼吸が上がってくる。大地の凶暴な肉棒は、収まるどころかさらに彼のジャージをパンパンに膨らませた。

「……ごめんなさい、試合に負けちゃって」

「いいよ、大地くん。かっこよかったんだから」

大地は美月のパーカーを捲り上げると、胸に舌を這わせてきた。

「んっ……ぁ、汗……かいてる、から……」

「そんなこと言わないでください。余計に我慢できないです」

（――あ、これ食べられちゃうやつだ……）

覚悟した瞬間、美月の下腹が甘く疼きだす。大地は美月の胸も脇もお腹も全部ペロペロと舐めた。外に人がいるため、美月は声を抑えようと必死で口を塞ぐ。

体験版はここまでです。
続きは製品版で
お楽しみください。
製品版の挿絵はカラーです。

